

東亜同文書院生とキリスト教

ふたつの書院精神

石田卓生

東亜同文書院とは？

東亜同文会(会長・近衛篤磨¹)が中国側の協力をうけて上海租界外に開校(1901.5)。

日中提携へむけた人材養成。

ビジネス・スクール←荒尾精²の日清貿易研究所関係者(根津一³など)の参画。

中国語教育『華語萃編』, 学生によるフィールドワーク「大旅行」。

同窓間のつよい団結力→「書院精神」あるいは「根津精神」。

どうして東亜同文書院とキリスト教なのか？

日本のキリスト教とのかかわり。

日本YMCA同盟の日露戦争慰問活動に参加(1904-1905), 同主事大塚素(1906),

同名誉主事ガレン・フィッシャー, 京都YMCA総主事村上正次(1917.4), 日本メソ

ジスト教会監督平岩愷保(1917.5)。

坂本義孝⁴の存在。

東亜同文書院第1期生, 東亜同文書院教授, 同中華学生部部长。

国際的活動; アメリカ留学, 国際労働機関(ILO)総会, 太平洋問題会議。

キリスト教; 上海日本人YMCA理事長, 同外国学校校長, 聖約翰大学⁵教授。

¹ 近衛篤磨。号は霞山(1863-1904)。経済・文化・政治など多方面にわたって啓蒙的活動を行う。ヨーロッパ留学経験をふまえて日中提携こそアジアの平和安定につながると考え、東亜同文会を主催した。

² 荒尾精。または義行、号は東方斎(1859-1896)。尾張の人。陸士旧五期生。漢口を中心に情報収集活動を行い、退役後、上海に日清貿易研究所を開設した。

³ 根津一。号は山洲(1860-1927)。甲斐の人。陸士旧四期生。陸大三期生(中退)。日清貿易研究所の運営にたずさわり、後に東亜同文会幹事兼東亜同文書院院長となった。

⁴ 坂本義孝(1884-1946)。福島県生まれ。管口税関勤務を経てアメリカで15年間生活し、南カリフォルニア大学東洋科教授をつとめた。国際政治学・平和学者坂本義和(東大名誉教授・国際基督教大学平和研究所顧問)は次男。

「書院精神」とはなにか？

王陽明の思想の影響 「知行合一」認識と体験行動の不可分。
「事上磨錬」日常での自己修養。
「良知論」民衆の苦しみを感じとる→大同論・王道論へ。

根津一の東亜同文書院入学式での徳育重視の教育姿勢。

根津一をめぐるキリスト教

キリスト教と王陽明の思想→内村鑑三の王陽明評価、「キリスト教に最も近い」。
→明治期の日本陽明学とキリスト教との親和性。

妻をい。キリスト教信者，同志社女学校高等科卒業。

東亜同文書院聖書研究会とはなにか？

英語講師ハネックス（上海 YMCA 協力主事）の聖書研究会。

表 全校学生数に対する聖書研究会参加者数⁶

年度(西暦/明治)	1901/34	1902/35	1903/36	1904/37
聖書研究会参加者	36	25	25~40	75~91
在校生数 (*入学者数/卒業生数)	79/60	175/136	243/208	248/208

院長根津一が認めた校内での活動。

北米 YMCA 同盟報告書に記録されている東亜同文書院聖書研究会とは？

上海 YMCA 総主事ロバート・E・ルイス報告(1901.8)資料。
→45名を2クラス，3名が洗礼，校舎に隣接する聖書研究会棟。

⁵ 聖約翰大学。1879-1952。上海にあったアメリカ聖公会系の大学。戦前における中国を代表する名門校。

⁶ 聖書研究会参加者数は、池田鮮⁷『曇り日の虹 上海日本人 YMCA40 年史』(上海日本人 YMCA40 年史刊行会 1995, pp.9-10) 及び後掲資料 にもとづく。入学者数は佐々木享⁸『東亜同文書院入学者の群像』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報』VOL.11, 2003, p.10) に、卒業生数は⁹『東亜同文書院大学史』(滬友会, 1982, p.84) にもとづく。

上海 YMCA 総主事代理 D・ウィラード・ライオン報告(1903.9.30) 資料 .
 →参加者 30～40 名, 中国人学生より哲学的な日本人学生.

キリスト教の宗教活動を校内でおこなう 東亜同文書院聖書研究会.

姿を消した東亜同文書院聖書研究会

表 校内のふたつのキリスト教グループの比較 聖書研究会と学生 YMCA

	校舎	時期	特徴
聖書研究会	高昌廟 ^{クイシヨリ} 桂墅里 (1901.5-1913.7)	1901-1904...?	・学校公認の校内活動. ・北米 YMCA 系の人物が指導. ・英語使用.
学生 YMCA	ハスケル ^{ハスケル} 赫司克而路 (1913.10-1917.4)	1915 -	・非公認同好会. ・神愛館バイブルクラス参加者が結成 ⁷ . ・学生と信者教員との勉強会.

1910 年代, 根津一はアメリカの中国進出への警戒を強める.

義和団事変賠償金をアメリカ留学費用へ. 1911 年清華学堂(現・清華大学)開校.

→この時期, 聖書研究会は姿を消し, 書院非公認同好会学生 Y M C A が成立している.

坂本義孝の東亜同文書院での活動はどのようなものだったのか?

精神面からの学校改革を提唱→キリスト教信教と「書院精神」が合致.

余にとりては近年書院が外務省文部省より細微の点まで検束するのでないかと疑るゝが之は余りに官庁に依頼するから嚴重なる取締といふ代價を支払はねばならぬのであつて[中略]もし官僚的形式主義を準して書院を経営せば内よりも外よりも破綻を來たす事必然である理当である⁸

殉難殉教殉道の精神あつて始めて書院の反省が意義付けられ, 書院の復興が実現し延いては東亜の復興に及び得るのである, 真に中国の為になる日本人ならば日本の為になる事は勿論である, 小我に捕はれ日本, 日本といふておる所には日本の為にもならぬ結果を生ずる, 書院が思切つて反省すべきは斯点にある, 身を殺して仁を成す, これ靈界に永遠に生くる唯一の方途である⁹.

⁷ 神愛館. イギリス人ミス・スミス主催の上海に住む日本人キリスト教信者のための教会.

⁸ 坂本義孝「改新時代の書院」『滬友』(25), 1924, p.18.

⁹ 坂本義孝「書院の反省時代」『滬友』(24), 1924, p.11.

東亜同文書院の発展 その軌跡はどのようなものだったのか？

中華学生部(1918), 専門学校令適用(1921), 大学昇格→根津一の私塾的存在から大日本帝国の学校へ.

外務省指導の強化(1923.3「対支文化事業特別会計法」成立).

表 対支文化事業特別会計法成立前後の東亜同文会及び東亜同文書院の経常収入と政府補助金の割合(単位:円)¹⁰

年度(西暦/元号)	1919/8	1920/9	1921/10	1922/11	1923/12
総収入	319,109.45	798,461.24	793,842.77		
東亜同文会経常収入	316,566.86	402,096.87	512,653.32	582,824.11	562,327.32
同会経常収入内補助金	116,960.00	124,010.00	171,533.00	179,533.00	182,726.00
同会経常収入内東亜同文書院経常収入		233,034.27	401,427.16	438,805.37	385,412.44
同会経常収入内東亜同文書院向け補助金		65,960.00	115,960.00	115,960.00	115,960.00
同会経常収入に対する補助金割合(÷)	37%	30.8%	33.5%	30.8%	33.5%
同会経常収入に対する東亜同文書院経常収入割合(÷)		58%	78.3%	75.3%	69%
同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合(÷)		53.2%	67.6%	64.6%	63.5%
年度(西暦/元号)	1924/13	1925/14	1926/15・1	1927/2	1928/3
総収入					
東亜同文会経常収入	606,310.29	602,459.54	623,472.20	611,456.88	690,945.60
同会経常収入内補助金	179,000.00	240,000.00	319,000.00	319,000.00	319,000.00
同会経常収入内東亜同文書院経常収入	455,554.70	435,260.00	466,559.39	465,670.47	505,638.00
同会経常収入内東亜同文書院向け補助金	110,000.00	153,000.00	192,000.00	192,000.00	192,000.00
同会経常収入に対する補助金割合(÷)	29.5%	39.8%	51.2%	52.2%	46.2%
同会経常収入に対する東亜同文書院経常収入割合(÷)	75.1%	72.3%	74.8%	76.2%	73.2%
同会経常収入内補助金に対する東亜同文書院補助金の割合(÷)	61.5%	63.8%	60.2%	60.2%	60.2%

ふたつの「書院精神」 それはどのような結末をむかえたのか？

「書院精神」; 根津一の思想・教育姿勢←明治期日本の王陽明思想解釈.

理想化; 坂本義孝のキリスト教信教と一致した「書院精神」 日中関係悪化→頓挫.

現実化; 大日本帝国の枠内では発展→敗戦と運命をともにする.

¹⁰ 『東亜同文会関係雑件』第一～六巻, 『東亜同文会関係雑件/補助関係』第一～三巻(外務省外交史料館所蔵)をもとに作成. 1920-1926, 1928分は各年次決算書の値. 1919分は1920年分予算書内記述, 1927分は予算書の値.

資料 上海 YMCA 総主事ロバート・E・ルイス報告(1901.8)

The enterprise of the Japanese in China is very marked. They have a government college here of one hundred Japanese students who are fitting to be interpreters in consular or business offices. We are teaching 80 of these students in daily English classes, and I have two weekly Bible classes with 45 members among graduates and undergraduates of this and other Japanese college. As the Bible may not be taught in the class-rooms of the college, we have rented a three-roomed tile roofed house just opposite the college buildings for a Japanese Association House. Could you look in on Sunday morning you would see from thirty to forty men sitting, Japanese style, on the matted floor and studying the Gospel of Mark with the American teacher, also sitting on a mat, in the midst of them. The little house is being fitted up for Association purposes, with the class-room on the left seating (on the floor) fifty students, with a reception room in the center and a reading-room on the right. Three of the class are baptized Christians, two more desire to be; but "more study and testing" was my reply to this request¹¹.

中国での日本人の事業は注目すべきものです。かれらには領事館や企業の通訳になるべき100人の学生を擁する政府系の学校(東亜同文書院)があります。わたしたちは毎日英語の授業でこの80名を教え、この卒業生と在学生や他の日本の学校の中から45名が参加する週一回の聖書研究会を2クラスもっています。聖書を学校の教室で教えることは禁じられているので、学校向かいに3室あるタイル葺きの建物を借りました。日曜の朝には30名から40名が、日本式に、床の敷物に直に座り、その真ん中に座るアメリカ教師とマルコの福音を学んでいます。そのささやかな建物は組織の目的にふさわしいもので、左側は(床に直に座って)50名が座る聖書研究会のもの、中央に応接室、右側に勉強部屋があります。聖書研究会に参加した3名はキリスト教の洗礼をうけ、2名がさらに洗礼を希望したのですが、わたしはさらに学び試練をうけなさいとこたえました。

資料 上海 YMCA 総主事代理 D・ウィラード・ライオン報告(1903.9.30)

Not the least interesting, I trust not the least fruitful work which I have been able to do in the line of Bible teaching during the year, was the class in the Japanese Commercial College in Shanghai. This class averaged between thirty and forty in attendance and was conducted in English. I find the Japanese students much more philosophical in their turn of mind than the Chinese Students. Many most interesting questions were asked in the class. Some of them were put in writing, and handed to me in advance. The following extract [extract] will indicate the nature of these questions:

"Will you kindly answer the following question please. I have heard that our Father in Heaven is omniscient [omniscient], almighty, and benevolent. But we see that there take place frequently in the world, earthquake, flood, thunder, the eruption of volcano [volcano], etc. If God has no force to make calm from these disasters, he is not omnipotent. If God did not foreknow that these matters take place, He is not omniscient [omniscient]. How do you think, Sir. Please answer it."¹²

興味深く、またわたしが信じているのは上海の日本の商業学校(東亜同文書院)で一年間に渡る有意義な聖書教育をすることができたことです。このクラス(聖書研究会)の参加者は平均30名から40名ほどで、英語が用いられました。日本人学生は中国人学生よりも性質がきわめて哲学的です。幾多の興味深い質問がクラスでなげかけられました。ときには筆記された質問が前もって手渡されました。次にあげるのは、その概要です。「どうかお答え下さい。神とは全知全能にして慈悲深いとききました。しかし、世界中で地震、洪水、雷、噴火などが頻繁に起こります。災害をしずめる力をもたないならば、全能ではありません。問題が起こることを予知しなかったならば、全知ではありません。どのようにお考えになりますか。先生、どうかお答え下さい。」

¹¹ Robert E Lewis "Report Letter Development in Shanghai" Shanghai: The International Committee of YMCA, 1901. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives. ()内補記、訳は引用者。

¹² D. Willard Lyon, "Report of D. Willard Lyon for the Year Ending September 30, 1903" Shanghai: Shanghai YMCA, 1903. University of Minnesota Libraries Kautz Family YMCA Archives.

坂本義孝著作一覧

- 「滞米印象記」『滬友』(17)東亜同文書院同窓会, 1921.11.
「同じ経験から」『滬友』(17), 1921.11.
「北京大会の意義」『滬友』(19), 1922.7.
「公人私人」『上海』(523)春申社, 1923.3.12.
「エルサレムにて」日本基督教青年会同盟『開拓者』18(5), 1923.5.
「渡欧の途上より」『滬友』(21), 1923.8.
「西本氏経営週報」『上海』を推奨す『滬友』(21), 1923.8.
「公人私人」『上海』(549), 1923.9.10.
「一人一言」『滬友』(23), 1924.1.
「書院の反省時代」『滬友』(24), 1924.4.
「改新時代の書院」『滬友』(25), 1924.7.
「遠藤保雄君を憶ふて」『滬友』(25), 1924.7.
「同窓と書院新興の気運」『滬友』(26), 1924.11.
「同窓会員として」『滬友』(27), 1925.3.
「中国に於ける経済的非協同」東亜同文会調査編集部『支那』16(8), 1925.8.
「同窓会員として」『滬友』(28), 1925.8.
「媽々鋪子戸籍調べ」『滬友』(28), 1925.8.
東亜同文書院教職員総代坂本義孝「弔辞」『書院近状 故手塚教授の追悼法会』『滬友』(29), 1926.2.
東亜同文書院滬友同窓会総代坂本義孝「弔辞」『真島教授逝去』『滬友』(29), 1926.2.
「東西南北集 漫言漫録」『滬友』(29), 1926.2.
「五卅事件と米支両国の関係」『支那』17(8), 1926.8.
「護憲社の性質と事業」東亜同文書院研究部『支那研究』7(2)(11), 1926.9.
「支那に於ける教育権回収の観測」『支那研究』8(2)(14), 1927.7.
「英雄出現と馬上統一は果して夢なる乎」『上海』(768), 1928.2.21.
「外人の觀たる支那」日華学会『日華学報』(7), 1928.12.
「支那の命運を傍觀すべきか」『支那』21(2), 1930.2.
「青年会は何をしているのか」上海日本人基督教青年会『上海青年』15(7)発行人古屋孫次郎, 1930.7.
「上海の将来」『支那研究』9(3)(18), 1930.12.
「中日親和の要諦」『日華学報』(12), 1930.
「滿洲問題と日支共存共栄」『上海』(899)上海雜誌社, 1933.5.5.
「対支外交の要諦」『上海』(908), 1933.10.1.
「非常時と我が外交政策」『上海』(913), 1934.1.1.
「門下生の霞山公想い出」『支那』25(2), 1934.2.
「滿洲国に対し大国的寛度を持てよ」『上海』(921)1934.5.
「支那の安全保障に就いて」『上海』(929), 1934.10.1
「支那の安全保障に就いて(下)」『上海』(932), 1934.11.20.
「日華両国提携に関する基本条件」『上海』(940), 1935.4.5.
「対日態度に関する支那言論界の趨向」『上海』(940), 1935.4.5.
坂本義孝(訳)「支那の対日言論; 一、密勒氏評論報; 二、中国評論週報; 三、民国週刊」『上海』(941), 1935.5.1.
「潜行式排日を根絶し得るや」『支那』26(8), 1935.8.
滬友同窓会総代坂本義孝代読「滬友同窓会の祭詞」『靖亜神社鎮座祭式典』『支那』26(12), 1935.12.
「根津先生十三回忌法要並に追悼晚餐及座談会」『支那』30(3), 1939.3.
「興亜政策の難易弁」『支那』30(5), 1939.5.
「時局收拾に関する示唆」『支那』30(12), 1939.12.
インタビュー 燎原の火の如き民族精神, 1942.3 木村英夫 民族の咆哮 秘録 聖戦と皇軍その実態(雲母書房, 1995).